

尹伊桑と近藤芳美の幼少年期

——近代朝鮮における作曲家と歌人の自己形成——

大田美和*

The Childhood of Isang Yun and Yoshimi Kondo in Korea

OTA Miwa

Isang Yun (1917-95), a world famous Korean composer and exile in Germany and Yoshimi Kondo (1913-2006), a Japanese *tanka* poet called “a locomotive of modern *tanka*” showed a deep interest and an earnest wish for the peace of East Asia and expressed it in their works. They failed to meet in Tokyo in 1992. This paper is an attempt to envision their failed conversation over their childhood in Korea under the rule of Japanese Empire and explore how they became artists in the period of modernization in the colonial Korea, by comparing their family background, their memories about Korea, their education of literature, history, music, and fine arts under the modern system or in the traditional way, and their attitudes toward the nation and the homeland. While Kondo was raised as an elite of the Japanese Empire without learning Korean language and culture and developed a longing for the Western culture, Yun learned and nurtured love and pride for a vanishing Korean tradition. Although Kondo showed a different attitude toward Korea and its culture from Japanese female poets in Korea such as Toshiko (Nakamura) Kondo and Kazue Morisaki, he developed a critical viewpoint about Japan and Korea because of his unmasculine sensibility and love for beauty.

キーワード：尹伊桑，近藤芳美，朝鮮，西洋，伝統，近代

Key Words: Isang Yun, Yoshimi Kondo, Korea, the West, tradition, modern

1. はじめに

東アジアの平和に深い関心を抱き、世界平和への祈念を表現活動として行っていた、作曲家の尹伊桑（1917-95）と歌人の近藤芳美（1913-2006）の対談が1992年11月に東京で成立していたとしたら、二人はまず何から話し始めただろうか？ 二人の共通点である朝

* 中央大学政策文化総合研究所研究員，中央大学文学部教授

Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University; Professor, Faculty of Letters, Chuo University

鮮で過ごした幼年時代を、まずは懐かしく語り合ったかもしれない。それは単なる思い出話ではなく、芸術家の原点を芸術家本人がどのようにとらえるかという作業ともなっただろう。尹伊桑とルイーゼ・リンザーの対談『傷ついた龍』（尹・リンザー 1981）も、「朝鮮での幼年時代」から始まっている。

尹伊桑も近藤芳美も、東洋人にしては背が高く大柄であったが、運動能力に優れた活潑な少年ではなく、感受性が強く内気な少年であったという共通点を持つ。実際の体格のみならず、出会った人に人間的な大きさを感じさせるという点でも二人は一致していた（徐 2012 : 124, 田井 2006 : 14-15）。

両者に大きいという印象を与えたのは、両者ともに詩人として作曲家としての義務感と責任を強く感じて実行していたからである。近藤も尹も自らに怠惰を許さず、高みを目指すことを常に心がけ、真摯にそれを実行した。韓国・統営^{トンヨン}にある尹伊桑記念館のキュレーターは、四十歳で本格的な作曲を始めた尹伊桑があれほどたくさんの作品を残したのは勤勉によるものであったと語った（2017年4月6日）し、近藤芳美は八十歳直前に「熊蜂の翅音ひかりにまぎるるを日の怠りに木椅子のねむり」〈歌集『希求』〉（近藤 2001a : 11）という歌を作って、老年のうたた寝さえも怠惰と呼ぶ厳しさを示している。

一方、日本統治下の朝鮮半島でそれぞれ朝鮮人、日本人として生まれ育った二人には相違点も多い。本論文では、第二次世界大戦に向かう日本統治下の朝鮮半島において、二人の芸術家の世界観と芸術観が幼少年期にどのように形成されていったかを比較検討することによって、芸術と政治状況との関わり、時代の潮流に対する芸術的感性と表現力を持つ人間の抵抗の可能性について考えてみたい。

2. 両親と家系

(1) 尹一族の栄光と、伊桑という名前の由来

尹伊桑は、族譜を持つ^{ヤンパン}両班の長男にふさわしく、父から祖先の来歴と東アジアの歴史との関わりを繰り返し教わったと思われる。尹伊桑の話によれば、尹一族は約三十七世代前に中国から、おそらく文化的な役割を持った使節として来朝した。尹という姓は中国語で、首領、指導者、引率者を意味している（尹・リンザー 1981 : 14-15）。『大漢語林』によれば、「尹」という漢字は、神聖なものを手にする形にかたどった象形文字から成り立っており、士族の長の意味から、つかさ・おさの意味を表し、また、おさめるという意味を表す（鎌田・米山 1992 : 415）。

「伊桑」という名前は、父が殷の時代の賢人、伊尹^{イユン}（朝鮮ではイユン、日本ではイイン）にちなんで付けた名前だという。尹伊桑によれば、伊尹は、桑の木の下で暮らした賢人で、

国王と大臣の度々の求めに応じて政治に参画し、全国に桑の木を植えて養蚕を盛んにした（尹・リンザー 1981：15）。

殷王朝初期の宰相伊尹については、様々な伝説や事績が伝わっている。尹伊桑は書堂^{ソダン}での勉強や父の教えによって伊尹について知ったと思われるが、養蚕の記述は古典の中に確認できず、独自の解釈を加えた可能性がある。伊尹と桑のつながりは、母親が妊娠中の夢の神女のお告げにしたがって大水の襲来から逃れるが、後ろを振り返るなという禁忌を破ったために溺れ死んで空桑（葉の疎らな桑の木）に変化し、大水が引いたあと桑の木から生まれて泣いていた赤子が伊尹であったという話に見られる（袁 1999：8-10）。この伝説には、英雄叙事詩にしばしばみられる捨て子伝承の他に、母が神の声を聴くことのできる神的な女性であったことと、アドニスを生んだミュルラのように禁忌を破って死後に化した木から生まれるという挿話を付け加えて、神聖性が強調されている（吉田・松村 2011：226-7）。尹伊桑の母が妊娠中に見た傷ついた龍の夢や、身分違いの結婚による婚家の仕打ちに耐えかねて家出した母が洪水の河で溺れそうになったエピソード（尹・リンザー 1981：21-22）は、この伝説と共通点があり、尹伊桑の、伊尹への親近感を高めたと思われる。

対談でリンザーは、意に反して政治に関わることになったという点で尹伊桑と伊尹は一致していると指摘している（尹・リンザー 1981：16）。伊尹には孟子によって否定されてはいるが、料理人に身をやつして王に仕官する機会を狙ったという政治的野心の大きさを示すエピソードもある（司馬 1971：17）（孔子、孟子 1972：238）が、尹伊桑は伊尹の政治的野心ではなく、優れたリーダーであったことと社会的貢献を強調している。尹伊桑は自分の名前が背負う意味を積極的に引き受けることによって、志を高く持って責務を果たすことを、使命として引き受けて行ったことがうかがわれる。

尹伊桑の祖先には統営の洗兵館^{セビョンガン}¹⁾の建築に参画した建築家もいるし、曾祖父は1866年に、来航したヨーロッパ船を国王の命により沈めた海軍士官である（尹・リンザー 1981：16-17）。地主であった祖父の一人息子である父は、医学の勉強を途中でやめ、漁獲業に失敗し、土地を次々に失う。両班は商人にはなれないので、職人を雇って小さな飾り机を作るなど家具製造業に従事した（尹・リンザー 1981：17-18）。これは螺鈿細工の漆工芸であり、統営の伝統的地場産業である。尹伊桑の父は詩人の集まりに出て、懸板に漢詩も書いていたが、当時の知識人や学者と同様に詩集を出版することはなかった（尹・リンザー 1981：18）。

尹伊桑は、母によれば父に似すぎているために父に疎まれたという。といっても、弟のほうが可愛がられたということであって、虐待や無視があったわけではないようだ。これは、跡継ぎの長男を立派に育てるための父親の厳しい態度として理解してもいいように思われる。一方、自分がやがて継承すべき家父長の姿を父に見るときの尹伊桑の視線は尊敬

に満ちている。彼は、祭祀をとりしきる父の沐浴や精神統一の姿と、父の祭文の朗読の美しさを語り、神秘的な祭りの雰囲気の中で素晴らしい中心となっている父への敬愛の念を語っている（尹・リンザー 1981：20）。

このような祭祀の際に列席者全員の心が完全に一致すると、祭物を盛る銅の食器からかすかな響きが聞こえ、それは死者の霊が食事をする響きだと聞いたので、精神を集中させ、耳を澄ませてその響きを聞いたという（尹・リンザー 1981：21）。これは、音楽家となった人の幼少期の聴覚の自主トレーニングのエピソードとして読むことができるだろう。

父の生き方は、平時には定職につかず、読書にふけるが、洪水でわが家が危険になった時は自ら立って堤防を築くのを助けるというものであった（尹・リンザー 1981：51）。これは模範的な両班の生き方として、尹伊桑の道徳的指針となった。

（2）近藤芳美の苦学の父と武家の娘であった母

近藤芳美の本名「芽美」とペンネーム「芳美」の由来は、少年期の回想記『少年の詩』に記されていないが、2歳違いの弟の「輝美」については、青島を陥落させた祖国の光輝を記念して命名されたという由来が記されていて興味深い（近藤 2000c：15）。近藤芳美が誕生した1913年は男子の誕生を国家の繁栄に結び付ける国家主義の時代よりも少し早かったため、家族が純粋に新しい生命の恵みに感謝して命名できたのではなかろうか。

父の名が「得三」という、農家や商家の息子にふさわしい経済的な安寧を願う名前であるのに対して、「芽美」という名前には雅趣がある。これは近藤芳美の母親に「昌香」という名前を与え、祖母に「音喜」という名前を与えた武家の文化から来たものと推測される。

近藤芳美の父、得三（1888？-1980）は、中国山脈の山間の農村（現在の広島県世羅町）出身で、数町の田を自作する中農の次男として生まれた。尾道商業学校を卒業後、神戸高等商業学校（東京高等商業学校、現在の一橋大学に次ぐ日本第二の高等商業）に、父親と親戚から学費を借りるなどして苦学して学び、韓国併合の1910年に、朝鮮の大邱の慶尚農工銀行に就職した。初仕事は奥地の村々への貨幣の現送であり、貴族の冠をつけ朝鮮服で朝鮮馬に乗り、髷を結った朝鮮人の通訳と並んで撮られた写真が残っていたという。結婚は、同郷の農場主の持ってきた縁談を受ける形で決まった（近藤 2000c：6-7）。

このような近藤芳美の父の姿を、近代の日本社会の変化の中に入れてみると、アジアで最初に近代化を成し遂げた国家の植民地に進出した、高等教育を受けたサラリーマンということになる。近藤の父は刻苦勉励によって支店長、さらには理事にまで登りつめた庶民のエリートである。したがって、わが身や家族の安全のために最善の選択肢を考えるにも、自分を越えた社会や世界のより良き発展を思考し推進するためにも、入手できる情報や知識や教養が十分ではなかった。このことは近藤の家族が敗戦後に身一つで引き揚げたこと

に表れている。これは、近藤芳美の戦後知識人としての形成を、優れた近藤芳美論（鶴見 1972, 2000）を残した鶴見俊輔（1922-2015）と比較して考える上でも重要になるだろう。

母の甲昌香（1875?-1984）は、芸州藩浅野侯の代々の上士の家柄で、戦国時代の加太の小領主に遡ることのできる家系の出身である。曾祖父は身内から側室を出したことによって祐筆となり権勢を得、財を築いた。明治維新後、祖父は破産し早世したため、祖母は監獄の女看守として、のちには産婆として働いた。その長女である近藤の母親には実家が豊かだった頃の記憶と家系の誇りがあって、息子の目にも気位が高く冷たい美しさを持つ女性と映った（近藤 2000c：12-13）。

家庭環境を考えると、不器用な父の妻子に対する愛情表現は興味深い。たとえば、馬山—晋州鉄道開業の試運転に招待され、父と弟と同乗したとき、終点の村で買ってもらったバナナ^{パン}麩の香りや、パカチの葉の生い茂る朝鮮家屋の藁葺屋根、ポプラのみどりとかササギの声は懐かしく描写されている（近藤 2000c：76）。父が母の琵琶の稽古のために稽古場から借りた譜本を半紙に丁寧に筆写する姿も『少年の詩』の中に登場している（近藤 2000c：56, 99）。

3. 海の記憶——馬山と統営——

近藤芳美も尹伊桑も、幼少年期を朝鮮半島の南海岸の町で過ごしたという共通点がある。馬山^{マサン}も統営も、朝鮮半島の南海岸に位置し、多島海に臨み、気候は温暖である。

(1) 新馬山と旧馬山

近藤の海の記憶は、まず、三歳のとき祖母に連れられて関釜連絡船で初めて玄界灘を越えた、不安で心細い長い航海の記憶に始まる（近藤 2000c：15）。当時は7時間以上の船旅であった（水野ほか 2012：76）。広島の中學進学後、近藤は学校の長期休暇のたびに玄界灘を渡るが、それ以前の幼少年期の海の記憶は、馬山がその大部分を占める。

馬山は『ブリタニカ国際大百科事典』によれば、慶尚南道の南部の都市で、鎮海湾の支湾である馬山湾の奥にあり、良港を擁する。新羅時代から軍事、商業の要地であった。高麗時代には元の二度にわたる日本侵攻に際して出港地となった。朝鮮時代には南岸最大の漁港で、海産物市場で知られていた。豊臣秀吉の朝鮮侵攻では上陸地の一つとなった。朝鮮王朝・顯宗の代から租米の積出港としてもにぎわった。1899年開港して外国人居留地が設けられ、同年4月ロシアの南下政策により日本との間で馬山浦事件が起きた。1910年の韓国併合以後は日本人の居留が多かった。古くから水質のよさを生かした醸造業が盛んで、

特に醤油の産地として知られている。

馬山浦事件とは、日露戦争（1904-05）以前の 1899 年 4 月に帝政ロシアが不凍港を手に入れようと、軍艦で馬山浦に入り、東洋汽船会社の杭を要地一帯に打ち込み、韓国に譲渡を要求した事件である。これに対して日本の陸軍大臣の意向を酌んだ釜山領事館が、在朝日本人の不動産業者・迫間房太郎に土地の買い占めを依頼。迫間は漁業家の弘清三を代理人として釜山領事館の馬山分館長・川上辰一郎と協力して買い占めに成功し、ロシアの軍港計画を頓挫させた（高崎 2002：74）。

近藤芳美はこの町には元寇のときの蒙古の幽霊が出ると伝えられる井戸があったと記述しており、この井戸は 1998 年の近藤芳美の韓国再訪の際にもその存在を確認されている（川口 2000）。馬山は日本人の移住後、古い港町である旧馬山と、日本から来た居留民が作った新馬山に分かれていた。町の居留民は銀行と取引する商人や、近郊の農場の不在地主たちであった。父の勤める銀行は旧馬山の市街にあった（近藤 2000c：10-12）。

近藤の両親は新婚のとき、旧馬山市街の裏山の麓の、入江を見下ろせる朝鮮家屋（元は尼寺）を新居とした。まわりは藁葺屋根の家ばかりであった。翌年、転勤のため蒸気船で統営へ移り、次いで大邱に転居している（近藤 2000c：13-15）。

二度めの馬山は、近藤が小学校 2 年生から 5 年生のとき、朝鮮殖産銀行馬山支店長社宅の生活である。馬山支店は旧馬山市街にあったが、家族が住んだのは新馬山の奥にある新築の日本風の平家で、花壇のある庭から穏やかな馬山湾が見渡せた。一面の麦畑と疎らなニセアカシアの並木が続く。新馬山には新設の女学校、白壁の酒造場の倉、瓦葺二階の大きな呉服屋、父の銀行の新馬山派出所の石造りの洋館があった。山の中腹に馬山神社があり、神社の背後には舞鶴山という岩山があった。馬山神社は 1909 年に鎮座され、1919 年に創建された天照大神を祭神とする神社であるので、日本人の移住者によって故郷の氏神が移植されたものが併合によって国家との関係を強め、1925 年に完成した京城の南山の朝鮮神宮によって社格を与えられたと思われる（神奈川大学非文字資料研究センターデータベース）（水野 2012：60）。山に登ると晴れた日には対馬が見えた。溪流の両岸には桜が植えられていた。府庁も芝居小屋も、帝政ロシアが建てたという煉瓦館もあった。このような日本人街とは対照的に、旧馬山は藁葺屋根ばかりであった（近藤 2000c：49-51）。

小学校は高台にあり、校庭には海の光が差し込んでいた。桃色のペンキを塗った瓦葺の平家の校舎は薄汚れ、崩れかけていた（近藤 2000c：52）。校庭のカラタチの垣根の外に、昼休みになると焼きたてのパンを売りに来る自転車の白系ロシア人がいたが、近藤少年は母から買い食いを禁じられていた（近藤 2000c：71）。

馬山湾の外は鎮海湾であり、鎮海は日露戦争以来の海軍要港であるため、毎年日本の連合艦隊が入港し、日本人居留民は軍艦の数と威容に胸をときめかせた。戦艦「山城」「日

向」, 巡洋艦「金剛」「榛名」, 駆逐艦, 潜水艦, 超弩級戦艦「陸奥」「長門」も来航した。軍艦乗船見学に参加できなかった幼い近藤少年は、夜、自宅の庭から見える軍艦のサーチライトに息を呑む。乱暴な遊びを好まない少年も、帝国の少年として戦艦の雄姿に心を躍らせているのが興味深い（近藤 2000c : 58-59）。

近藤芳美と軍隊の関係は皆無ではなく、1910年の韓国併合時に密命を帯びて、併合失敗に備えて王宮に小隊と共に潜んだという将校の大叔父がいる。のちに近藤が召集されたときにこの叔父から餞別として贈られた将校鞆は、農民漁民からなる部隊の古参兵の憎しみの的となった（さいとう 2006 : 32）。

近藤少年は海水浴も楽しんだが、海の恐ろしさも知っている。活動写真ロケ隊が来訪して、溺れた生徒を救おうとして教師が殉死したという美談の映画を撮影したしばらく後、現実に生徒の水死事故が起き、搜索の船のカンテラの灯を自宅の庭から見守ったと記している（近藤 2000c : 62-63）。

(2) 統営

一方、尹伊桑の統営の海の記憶は、海上に浮かぶ漁船や、夜の星空の下の漁夫たちの歌声や、朝の魚市場の飛び跳ねる銀色の魚たちといった和やかな港町の風景である（尹・リンザー 1981 : 14）。父と夜釣りをしたときの、海上で魚の跳ねる音や、満天の星空の下で聴いた漁夫の歌声（南道唱と呼ばれる沈鬱な歌）も思い起こされている。（尹・リンザー 1981 : 19）

統営は、*Britannica Academic*によれば、慶尚南道南部、固城半島の南端にある港湾都市で、その名は1603年以来朝鮮王朝の水軍の本部が置かれたことに由来する。沖合いを巨濟島、閑山島、弥勒島に守られた良港がある。1945年の独立後、忠武公李舜臣チュンム イスンシンにちなんで忠武市と改名したが、1995年に隣接地域と合併して統営市となった。漁業が盛んで貝類の養殖も行われ、魚網製造、海産物加工、陶器、耐火煉瓦の工場がある。螺鈿細工の漆工芸品（飾り机など）が特産品である。

尹伊桑が独りで禁じられていた夜釣りに行ったエピソードでは、15メートルの崖を這い下りて、釣りはせず、星空の元にたった一人で座っていたと語られていて（尹・リンザー 1981 : 19-20）、イギリスのロマン派詩人ウィリアム・ワーズワスの『序曲』の一節にあるような、芸術家の幼少期にふさわしいロマンティックなエピソードとなっている。

このような作曲家自らの語りは、故郷を離れてヨーロッパで地位を築いた世界的作曲家の自己表象として読むべきものであろう。それに比べて、近藤芳美の自伝的小説は、ヨーロッパの教養小説を念頭に置きながら日本の旧制高校出身者らしい抑制を保っていて、微妙な質的差異がある。近藤芳美の少年期の回想記『少年の詩』と文学的自伝小説『青春の

碑』と、尹伊桑の対談『傷ついた龍』という三つの一次資料を同じように扱う難しさを自覚した上で、これらの資料に依拠しながらさらに比較と考察を進めていきたい。

子どもたちが干潮のとき砂浜の穴に味噌を突っ込んでしゃこ取りをする様子を語る描写（尹・リンザー 1981：20）は、韓国の国民的画家である李仲燮（1916-1956）が朝鮮戦争期に済州島で避難生活を送ったとき、飢えをしのぐために海浜で家族と一緒に蟹や魚を捕まえた体験と、のちに繰り返し描かれた二人の子どもとカニと魚の絵を思い起こさせる（李仲燮 2016）。尹伊桑も、生きるための労苦と喜びを経験していったのである。

統営は大学町ではなかったため、政治的な活動をしたのは学生ではなく、労働者、市民や知識人の息子たちだった、という尹伊桑の指摘も興味深い（尹・リンザー 1981：38）。三・一独立運動とその報復としての大量射殺の記憶は、日本人に虐殺された勇敢な自由の戦士だったという墓地の碑文が、日本の警察の指示によって削り取られては、繰り返し復元されるのをよく目撃したという形で語られる（尹・リンザー 1981：38）。禁書とされた李舜臣提督の物語の口承から愛国心を育てたというのも、日本による植民地支配の中で独立心と社会的意識を高めていく様子を伝えている（尹・リンザー 1981：39）。

4. 近藤芳美の朝鮮体験と日本

父が転勤族であったため、近藤芳美は幼少年期だけでも、馬山、統営、大邱、金泉、咸興、ふたたび馬山というように朝鮮半島各地の生活を経験している。1963年に朝鮮民主主義人民共和国を訪問するまでソウルより北に行ったことのなかった尹伊桑に比べると、近藤芳美は気候温暖な南部の海岸地域とは異なる、北朝鮮の厳しい冬をよく知っていることが大きな違いとしてあげられるだろう。このことはのちに朝鮮戦争のときに断片的に届く朝鮮全土の戦況と避難民の群れのニュースを日本で聞く中で、近藤芳美に大きな嘆きをもたらし、「ああ吾に京城は美しき記憶にて無人の街に入り行く部隊」などの短歌を作らせた（近藤 2000d：296）。

(1) 金泉での生活

近藤芳美が三歳で広島に預けられ、弟妹を連れた母が迎えに来て帰った先は金泉であった。この頃、父の勤務先は他の地方農工銀行と一つにされ、朝鮮殖産銀行と改名し、その支店長となる。支店長社宅は豪壮な二階建ての日本家屋であった。さらに下の妹が誕生する。「オモニ」（朝鮮語では「母」の意だが、当時日本人が朝鮮人の年長の下女や乳母を呼んだ名前）に手をひかれ、小学校校庭に遊びに行ったこともあったと近藤は書くが、このオモニの顔は見えない。「家の「オモニ」は幾人も入れ替わった。そのひとりひとり、柔和

であり、互いに似た弱弱しい笑みをわたしたち日本人に見せた。」（近藤 2000c：28）。この柔和な笑みは、映画『白磁の人』の中で浅川巧（1891-1931）が知らされた、支配者である日本人にこれ以上ひどい目に遭わされないようにするための、朝鮮人たちの自己防衛としての作り笑いである。これでは人と人の心の交わりが生まれるはずもない。

両親が次の転居の準備に忙しいとき、弟を連れてこっそり朝鮮人街へ行ったというエピソードがある（近藤 2000c：30-31）。何も得られず、弟はべそをかき始めて、オンドルに焚く松葉の匂いと、キムチ用のトウガラシを広げて干している色と、朝鮮犬の吠える声だけが、少年の記憶に残った。「両親には告げずに来た冒険が、泣き出した悔いになろうとしていた」（近藤 2000c：31）。朝鮮人たちの日常生活は、すぐ身近にある風景であっても、深くは関わることはない異文化であることがわかる。

（2）咸興での生活

金泉から移った咸興は鴨緑江上流に位置し、蓋馬高台の森林には武装ゲリラが潜むと言われたと近藤は記している（近藤 2000c：32）が、韓国併合後、新興工業地帯として期待され鉄道の敷設が進んだことが、近藤たちがそこに住んだ8年後の『京城日報』1928年10月25日付にある。支店長である父の社宅は平屋の大きな日本家屋で居間のみオンドルがあった。裏の山崖から梟の鳴く声が聞こえた。近くの崩れかけた朝鮮家屋の長屋に一人住む憲兵下士官から近藤少年は「不逞鮮人」という差別語を教わる（近藤 2000c：32-35）。

さらに行くと、藁葺の朝鮮人の街が続いている。年に一度の郡庁での農産物品評会の日には、牛馬、色とりどりのチマ、汗と体臭と罵り合う異国の言葉でごった返す。馬山が日本人街と朝鮮人街の二つに分かれていたのに対して金泉の日本人街は、四囲を朝鮮人街に取り囲まれていた。この頃病みがちになった母の煮る朝鮮人参の匂いを近藤は記憶している。そして冬には、酒も野菜も雪も凍る北国の厳冬を経験する（近藤 2000c：32-39）。

咸興は朝鮮王朝の始祖李成桂の故郷であり、その近郊の本宮には朝鮮王朝の始祖たちの陵墓があった。この陵墓周辺は「帝和陵景」という名で名所として知られていた（朝鮮写真絵はがきデータベース）。その陵墓まで家族で人力車に乗って出かけたエピソードがある。まばらな松の木立の中に、陵墓も陵墓をめぐる石人と石馬も、荒れ果てて、草深く埋もれていた。瓦の崩れ傾いた廟殿の鍵を開けてもらって、朱の漆の祭器の類が朽ちているのを見る。帰途、カササギが鳴く日暮れの空の下、近藤一家を乗せた人力車が、黒牛に引かせた車の哀号と泣く朝鮮人の若者を追い抜く。近藤芳美は「同じ哀号を幼い日、朝鮮のどこにいても絶えず聞いたと思う。」（近藤 2000c：45-46）と記している。

「アイゴ」という感嘆詞は、朝鮮語をほとんど知らない日本人でも知っている朝鮮語である。このエピソードでは、若者の個人的な悲嘆かもしれない嘆きの言葉を、国を奪われ

た民衆の嘆きに重ねて受けとめている。日本人にとっては休日の気晴らしに過ぎない異民族の歴史の遺物の見学と、朝鮮人の嘆きがさりげなく並置されているところに、表現者としての独自の視点がある。

咸興尋常高等小学校に入学した近藤少年は、紺の着物に袴を履き、布鞆を持って登校したが、一年も経たないうちに父の馬山転勤が決まり、転校することになる。先生は、馬山は内地に近く、桜の花の咲く、暖かく美しいところと語る（近藤 2000c：46-48）。

転任に伴う家族の引越しは、朝鮮東海岸の鉄道に乗り、京城に出て、数泊してから京釜線で三浪津まで行って乗り換え、馬山へ行くという不便な旅だった（近藤 2000c：49）。

このように朝鮮半島の北と南の異なる風土での生活経験と、父の転勤に伴い朝鮮各地に帰省した度重なる移動の経験が、のちに近藤が国内のみならず、ヨーロッパや中国などを好んで旅行したことの基にあると思われる。

(3) 軍都広島での生活

近藤芳美は、他の植民地の良家の子弟と同様に、内地での中学進学のために小学校の最終学年から広島の祖母宅に寄寓した。祖母の家の隣は紅殻工場で、庭と家の中にまで赤い顔料が降り積もった。気丈で気位の高い祖母は産婆をし、叔母は女学生で、二人とも無口である。近藤少年は、放課後は裏の旧城のあとに行き、内堀の蛙たちの声と蓮の茂る水が夕映えに染まるのを見ていた（近藤 2000c：112）。

陸軍将校の団体が設置した私立済美小学校は、白い築地垣、白壁に瓦葺の平屋の校舎、柱列のつづく石畳の外廊下、校庭のポプラの老樹というように美しかったが、潔癖な近藤少年は、早熟な同級生が広島弁で語り合う猥談に嫌悪感を持つ（近藤 2000c：111）。

広島弁と言えば、近藤芳美が朝鮮に暮らす日本人であった自分たちの話す言葉を、「わずかに北九州一帯の訛りは混じってはいたが標準語と違ってよかった。」と表現しているのは興味深い。広島弁との対照という文脈で「標準語」という言葉が選ばれたのかもしれないが、近藤よりも一世代若い作家森崎和江（1927-）は、東京語にも共通語にも地方ごとの訛りがあったという理由で「標準語」を「方言のない学習用語」と呼び、朝鮮では植民者の子どもも朝鮮人の子どももそのような日本語を使ったと表現していることと対照的である（森崎 1991：47）。

(4) 三・一独立運動の記憶

1919年、三・一独立運動が起こった時、近藤芳美は5歳で咸興に住んでいた。その日は「ヨボが恐ろしいから、家を出てはならない」と母に言われた。「ヨボ」とは日本人が朝鮮人男性を指す蔑称だった。夜明けから家の門の前にも銃剣を抱えた衛兵が立ち、地方法院

など市街の要所に憲兵が配置された。白い民族衣装をまとい、冠をつけた朝鮮人の群衆に対して、騎馬の憲兵がサーベルを抜いて威喝した。万歳騒動と呼ばれたが、自分の記憶にあるのは憲兵のサーベルを避ける無言の波であり、ひそかに心に抱いた恐怖だと近藤は記す（近藤 2000c：43-45）²⁾。また、地方法院に、毎日のように黒塗りの囚人馬車が来て、編み笠をかぶり、互いに縄につながれた囚人らが降り立って、巡査に守られて建物に入るのを見て、それは「万歳騒動」の「不逞鮮人」だと聞かされたという記憶も記されている（近藤 2000c：46）。

この後、父が光州に転任したとき、前年の光州事件（独立を求める学生の蜂起）の話を聞いてよみがえる三・一独立運動の記憶を近藤は『青春の碑』に記している（近藤 2000b：79-80）。独立万歳を叫ぶ喪服の朝鮮人たちの群れに、黒服の警官隊が割って入ると、群衆が波のように一方に崩れてゆらいだ場面を、幻燈の画面のように近藤ははっきりと記憶していた。家の前に歩哨兵がおり、小学生は巡査に守られながら登校したのである。

太宰瑠維が『青春の碑』の「解説」で記すように、「経済的には圧倒的な優位に立ちながら、憲兵警察（のちに普通警察）に守られて、一般の朝鮮人の中ではむしろ孤立していたと思われる日本人社会」（太宰 2000：610）があった。太宰は、近藤の「万歳事件」で体験した恐怖は、自伝的小説『青春の碑』の主要テーマの一つである、状況の中での「個」の恐怖であるとし、そしてこの恐怖は「万歳事件」で体験した恐怖を起点として、様々な形をとって深まっていくとし、戦争への恐怖は反戦運動弾圧への恐怖とも交錯して、複雑化してゆくと指摘している（太宰 2000：611）。高崎宗次は、「朝鮮人に襲撃されるかもしれないという恐怖は、三・一独立運動の印象もあっただろうが、より根本的には、自分たちの存在が朝鮮人によって否定されているという直感によるものだったろう。」と指摘している（高崎 2002：140）。1919年の三・一独立運動後に憲兵警察制度が廃止され、普通警察の制度に替わっても、朝鮮の警察官は犯罪取り締まりだけでなく、清潔検査、不審者検問、指紋採取、家屋消毒など、朝鮮の社会生活全般を統制した（水野 2012：34）。

（5）日本人社会での孤立と朝鮮人社会との距離

近藤芳美は転勤族であり、銀行の支店長である父を持つことと、気位の高い母に育てられたことと、広島での祖母と叔母たちとの静かな生活、運動よりも読書や詩作や絵を描くことを好む少年であったことから、孤独な少年として育つ。

興味深いことに、旧馬山に職場のある父は、妻子よりも朝鮮人街で多くの時間を過ごしていた。銀行内での仕事の他に、部下や取引相手との遊興もあった。父は支店に毎日通い、新馬山派出所にも日を決めて立ち寄り、さらに銀行の勤務の間に、頼まれて旧馬山の町の

商業学校の講師もした。そこで学ぶのは主として朝鮮人の子弟であり、三十代半ばの父はこの教える仕事を楽しんでいたらしい（近藤 2000c : 55）。

このように、経済活動上の必要に迫られて朝鮮人社会と日本人社会に生きた父に対して、近藤が幼少年期を過ごした新馬山の支店長社宅に出入りする朝鮮人は、女中などの限られた朝鮮人である。学校は制度として、小学校から日本人の小学校と朝鮮人の普通学校に分けられているので、子ども同士が交わって遊ぶということもない（水野 2012 : 60）（高崎 2002 : 74-75）。

出入りの商人の中に、盤台を朝鮮人の若者に担わせて得意先をめぐる、九州出身の女の魚屋がいて、暇をとった朝鮮人の「オモニ」の代わりに天草出身の「ねえや」を連れてくる。天草から働きに来る女が朝鮮には多かったという。この女中に伴われて、初めてカトリックの教会へ行ったとき、神父はフランス人で、信者は皆朝鮮人であった（近藤 2000c : 64-65）。労働者階級においては、日本でもそうであったように、支配民族である日本人と、被支配民族である朝鮮人が日常生活の中で混じり合っていたことがわかる。

旧馬山の朝鮮人街で行われるその年の豊作の吉凶占いである大綱引きを一家で見に行ったときの思い出の記述は、旧馬山で働く父親と、新馬山で暮らす家族の、朝鮮人や朝鮮文化との距離感の差異を際立たせるものとなっている（近藤 2000c : 104-106）。父にとってそれは自分が支店長を務める銀行のある商店街で行われる行事であり、また、父の銀行業務は旧馬山の背後に広がる農村への、日本人地主らによる大規模な水田経営のための投資なので、この行事への参加も業務の一つといってもいいだろう。だが、これは新馬山で日常生活を送る支店長の妻子にとっては、異民族の見慣れない風景や生活臭に戸惑いと不快感をもって接する機会となった。

支店長一家は特別に用意された日本旅館の二階から行事を見物することになる。狭く迷路のような商店街に、種物屋や薬屋の藁屋根がひしめき、煙草とニンニクと汗の匂いと、港で採れた「明太魚」の乾物の臭気がたちこめている。朝鮮語を知らない近藤が現地語に合わせて鱈を「明太魚」と表現しているのは興味深い。これは漢字で表記されていたのでわかったのだろう。当時はハングルよりも漢字の掲示が主流であった。祭のために着飾った市民と近郊の農民の群れと、赤と青と緑の原色の縞模様の袖の晴れ着をまとった女たち、巨大な蛇のような大綱に巻かれた色とりどりの布、旗と幟。群衆の興奮ゆえに事故も起こる。朝鮮語を知らない近藤の耳に朝鮮人の会話は怒声のように陰しく聞こえる。真鍮の喇叭と長鼓と銅鑼の単調で、しかも鋭い、人の絶叫のような悲しみを感じさせる音楽も、朝鮮語同様に、近藤の耳には異物と受けとめられただろう（近藤 2000c : 104-5）。

大綱引き見物の描写の最後に、近藤は自分の立ち位置を客観的に振り返る。

旧馬山はわたしの生れた町であり、朝鮮は育った地であった。しかも、わたしは朝鮮を知らず、朝鮮人らと関りはなかった。ことに少年期の大半を過ぎた馬山という特殊な殖民地小都市の環境が、わたし自身の無知と無関心とをなおさらそのままのものとしていったのであろう。そこには彼らは住まず、彼らの集落も周囲にはなかった。

だが、わたしのいるのは異国であり、異民族の中であった。そのひそかな恐怖のようなものに不意に気付いていたのかもしれない（近藤 2000c : 106）。

近藤芳美にとって朝鮮は異郷だが、ふるさとであった。小学校の最終学年で広島 of 祖母の下に寄寓して初めての夏休みに、一人で馬山に帰省したときの気持を近藤は次のように語る。

夏休みに馬山に帰省した。初めての一人旅でもあった。玄界灘を渡り、関釜連絡船を釜山の埠頭に降りたとき、心踊るような歓喜があった。海に迫る真裸な山肌も、くるめくほどの空の藍も、また立ち漂う温突の松葉の匂いも、すべてわたしの知って育った朝鮮であった。それはただ一つ、わたしの生れた国とも言わなければならなかった（近藤 2000c : 112）。

それから数十年が経ち、戦争も経て、『少年の詩』の原稿を書くころになっても見る夢があるという。ふるさとを追い出される夢である。

ときどき、今も見る夢がある。

わたしは何かに追われて街を急いでいる。白い、一筋の道である。家々は戸を鎖し、人影もない。

その廢墟のようなひそけさを、駅に向かって歩み急ぐ。駅に待つ、日本に帰る引揚げ列車に間に合うためである。わたしたち日本人は、もはやここにはならない—
そうして、それが馬山であることも夢の中で知っている。町の十字路も、郡庁も、石垣の下の草原も、わたしはありありと夢に見ながら歩みつづける。

覚めたあと、激しい、郷愁とも呼ぶべき感情が胸をつき上げるが、無論、すべては遙かな歳月の彼方のことである。しかも、それを郷愁として言うことばはわたしたちには許されぬ。そこは日本ではなく、日本の殖民地でもない。日本の敗北以来、わたしは一度も彼らの国を訪れてはいない（近藤 2000c : 114）。

近藤芳美は1940年に徴兵され、1942年暮れに京城（当時）で召集解除となり、1943年

10月に上京したために、この夢のような形の大陸からの引揚げは、実際には経験していない。これは、近藤芳美の両親と弟妹、それから多くの日本人の引揚げ者が経験して語ったことが、夢の形であらわれたものであろう。敗戦時一時生死不明だった両親と弟が着の身着のまま引き揚げて、リュックサックに縫い付けて隠し持ち帰り、まもなく紙切れとなった紙幣を父が見せた思い出は繰り返し語られる(近藤 2000d: 231-2)(近藤 2000c: 114-5)。ここには、植民地で暮らしていた「私たち」の共通の思いと、「私」一人の思いがある。

以上のような朝鮮に対する断ちがたい思いを郷愁と呼ぶことの禁止と再訪の禁止を、短歌の言葉として近藤芳美が表現できたのは、『少年の詩』の出版(1980年)から18年経った、1998年、韓国訪問の旅の折であった。近藤芳美は85歳になっていた。

敗戦近く機雷の海を渡り帰る再び行かず行きてならざりし(歌集『命運』)

やすやすと行きてならずと決めしよりこころに久しついの係恋(同)

(近藤 2001b: 245)

近藤芳美の朝鮮体験を、のちに妻となった八歳年下の歌人の中村とし子(1918-2010)(結婚後は近藤とし子)や、一世代下の作家の森崎和江や歌人の川口美根子(1929-2015)と比べてみると、興味深い。近藤芳美の父親と同様に苦学して朝鮮に渡った教育者の父を持つ、森崎和江は、「移植された草のように、私は元気よくわきめもふらずにその大地を吸い、自分自身の感情や感覚を養った」(森崎 2007: 26)と振り返り、「植民地朝鮮の一番おいしいところを、たっぷりと吸いこんで心も目もうるおった」と語る(森崎 2007: 224)。朝鮮市で買い物をして(森崎 2007: 126-7)、朝鮮人の通う中学校の校長である父が朝鮮人の家庭からお土産に持ち帰った菓子やキムチが母の焼くカルビとともに食卓に上った(森崎 1991: 137)。森崎和江は幼児雑誌「キンダーブック」(1927年創刊の日本初の保育絵本)を読むが、朝鮮伝統の女子の遊具であるノルテギで遊んだ記憶も持つ少女であった(森崎 1991: 54, 55)。そして、森崎和江も川口美根子も、韓国渡航が可能になるとすぐに再訪した³⁾が、近藤芳美は異なる態度を取った。1980年代初めに近藤芳美と同じ職場(神奈川大学)にいたことのある建築家・漢陽大学教授の富井正憲によると、近藤は韓国と交流し、韓国研究を行う富井に対して時期尚早であるという発言をして、その語気の激しさを不思議に思ったという⁴⁾。

近藤(中村)とし子は、京城帝大教授を父に持つミドルクラスの令嬢として育ち、晩年まで卓抜のファッションセンスを見せていたが、青春時代にはアララギの歌会で洋服、和

服、朝鮮服と様々な服装で近藤の前に現われている。そのうち、白絹の上衣に藤色の裳裾を巻いた朝鮮服で現われた場面を、本論が分析の対象とする幼少年時代から離れるが、少女時代の結果身につけた朝鮮文化への姿勢として分析してみたい。それは「アララギ」の歌会の場面である。

その歌会では、「アララギ」に掲載された近藤の彼女を歌った相聞歌が取り上げられる。そのうち一つはのちに歌集『早春歌』に掲載された「風邪気味に顔ほてらせてありし夜に始て人の美しかりし」である。恋する青年である近藤は、中村とし子が自分の恋の歌とそれに加えられる批評をどのように受けとめるかがあって、彼女がいつもと同じように批評の言葉などを雑誌の余白に書きとめているとき、「うつむいた短い上衣の、胸に締めて結んだりボンのような紐が息づきとともに揺れた。」と描写している（近藤 2000c: 137）。韓流ブームを経た 21 世紀には、韓国朝鮮文化に興味のある日本人なら知っている「チョゴリ」や「オッコルム」という朝鮮語の語彙はもとより朝鮮文化に対する興味を近藤が持っていなかったことがわかる。これはむしろ、中学からの男女別学と、男子が女子の領域である衣食住のことなどに興味を持ってはならないというジェンダー別の教育の成果でもある。

近藤（中村）とし子は、二回生として入学し卒業した京城の清和女塾⁵⁾の同窓会に戦後 1970 年代には参加していたことが、「近藤芳美寄贈図書」にある三冊の同窓会誌『清和』19 号（1971 年）、20 号（1975 年）、21 号（1977 年）からわかる。朝鮮とその文化に対して、帰ってはならない故郷への思いを封印した近藤芳美とは微妙に異なる距離感がうかがわれるが、近藤夫妻は西洋的な恋愛結婚の夫婦である反面、仕事と家庭では夫唱婦随であったため、妻が夫の意志を曲げて一人韓国を訪問することはなかった。

以上のように、同じ植民地の日本人であっても、朝鮮人や朝鮮文化に対する距離感や姿勢に微妙な差異があった。少女や若い女たちは、お洒落心や美的好奇心から民族や政治の壁を易々と乗り越えた。一方、近藤芳美の父のような大人の男たちは仕事の必要から異民族と交わってぶつかりながら活動している。それに対して、日本人街で経済的に恵まれ、安全に囲われた生活を送る名流夫人と、彼女たちに帝国のエリートとして育てられる少年は、異文化と異国語に無知なまま育ち、無知ゆえに異民族を一層恐れ蔑視する。近藤芳美もそのような少年である一方、文藝や芸術の愛好といった当時の男らしさから逸脱する傾向を秘めた少年でもあったため、こののちも、名流夫人とも帝国のエリートとも異なる感性と決意を密かに育てていくことになる。

5. 尹伊桑と近藤芳美の芸術との出会い

(1) 尹伊桑と生活の中の音楽, 伝統音楽

尹伊桑の場合, 最初の音楽の記憶は, 生活の中の音楽ともいべきものだった。夜は漁夫たちの夜の歌声や, 夜の水田の蛙の歌に耳を傾けた。昼間は母を含めた田で働く女たちの歌う民謡に耳を傾けた。尹伊桑は感じやすい子どもであったため, よく泣き, よく歌ったという。両班の父は当然ながら一度も歌わなかった(尹・リンザー 1981:23)。

尹伊桑は, 日本統治下にもかかわらず, 民族の伝統文化に, しかも支配階級の文化と民衆の文化の両方にたっぷり触れることができた。たとえば, 朝鮮王朝解体により職を失い旅回りとなった歌舞の一座(演目は「沈清」などの一幕)に夢中になって, 次の村までついていって両親を心配させたこともあったという(尹・リンザー 1981:23-24)。また, 満州から来た母の裕福な親戚の宴会で, 妓生たちの独唱や合唱や, モンゴルの胡弓や玄鶴琴^{ホグン コムンゴ}などの伝統楽器の演奏に接することもできた。それ以上に印象的だったのは, その家に滞在中に夜中に山中から聞こえて来た美しい男の歌声だったという(尹・リンザー 1981:24-25)。

統営の野外劇場の, 素人役者たちに演じられる,^{オクワンデ}五広大(仮面劇の一種)も見たことがある(尹・リンザー 1981:25)。また, 家族が重病になると呼ばれた呪術師の儀式の記憶もあって, 呪術師たちの礼拝の形式に魅惑された。それは三日三晩も続く「舞台」であり, 基本の型と即興から成り立っていて, のちに「南無」^{ナム}の中でこの印象を現代音楽の言語に置き換えた(尹・リンザー 1981:26-27)。尹伊桑はこの印象を「聴覚的な印象」と言っているが, 言葉と演技と演奏による総合芸術を西洋音楽からではなく民族の伝統として身近なものとして何度も聞いて血肉化していったと言える。

中国人の猿回しや皿回しなど村の娯楽のための笛と太鼓と一種のオーボエによる伴奏音楽(尹・リンザー 1981:29-30)にも親しんだ。居酒屋から出て来た男が歌った古い歌劇の一節に対して, 別の男が応答をして, 即興劇のようになったのを目撃したこともある(尹・リンザー 1981:30)。満月の夜遠くに遠くで聞こえた「菩提」^{ボリヨム}(南道唱の一種)(パリー經典から取った歌)の歌声を聴いて, 米穀商人が歌声の主であった出稼ぎの小作人と応答し, 酒を酌み交わしたという話も, 地元に伝わる話と思われる(尹・リンザー 1981:30-31)。

他に, 気候温暖な南海岸ならではの真冬の風揚げ祭, 三月のつつじ祭り, 陰暦四月の仏生会, 書堂の提灯祭, 満月の夜に黙って橋を百回渡る願掛けのための儀式, 五月の四百年の歴史のある寺院^{チヤング}⁶⁾の, 長鼓を首にかけて叩き, 歌い, 寺院へ向かう春祭りなどの伝統行

事を経験した。これらは民族的な自覚を失わないための、日本支配に対する抵抗としての静かな表現でもあった（尹・リンザー 1981：28-29）。

（2）近藤芳美と「新しい童謡」運動、西洋音楽と伝統音楽

日本の統治下においても朝鮮文化を様々な形で享受し、そのエッセンスを吸収していった尹伊桑に対して、近藤芳美は西洋近代をめざすべき目標とする近代日本の教育を受けている。近藤芳美の小学校時代の回想は、植民地に育つ日本人がどのような教育を受けたかを考える上で興味深い材料を提供してくれる。

近藤芳美は東京の学校を出たロイド眼鏡をかけた長髪の音楽教師から、小学唱歌ではなく、新しい童謡を教わる。ちょうど東京で野口雨情や北原白秋の創作童謡の運動が行われた時期であった。上級の女子生徒はシューマンやシューベルトの二部合唱を歌わされる。その結果、遊郭の子の玄人はだしの裏声の歌唱は、この教師によって批判され、同級生の畏敬の念は軽蔑に変わる（近藤 2000c：77）。このように、近代化の進展によって日本の民俗芸能が周縁や最下層に押しやられる中で、近藤少年は成長していく。

近藤少年の初めての西洋音楽との出会いは、馬山演舞場の『噫無常』などの活動写真に白系ロシア人楽師がバイオリンで伴奏するのを聴いたことに始まる（近藤 2000c：81）。

この後、東京のオペラ団の『カルメン』の興業が初めての西洋の舞台芸術との出会いになるはずだったが、近藤家ではおそらく猥雑という理由で見ることが許されなかった。ここには西洋崇拜の中でも日本の封建的な倫理観と相容れないものの忌避という近代日本の独特の構図が見て取れる。結局、オペラ団訪問は、オペラの団員と馬山の日本人住民の野球の親善試合の折に、夏服の美しい女優たちが桔梗や女郎花を摘む姿を眺めたという、視覚的な喜びの記憶に終わる（近藤 2000c：80-83）。

しかしながら、西洋音楽との出会いは別の形であった。新馬山のプロテスタント教会の日曜学校に通うようになった近藤少年は、讃美歌の歌詞と旋律に心を魅かれるのである（近藤 2000c：83-87）。キリスト教との出会いは広島祖母の家で若い叔母から教わったのが最初で、次いで天草の「ねえや」と行った旧馬山のカトリック教会の礼拝があったが、これは三度目の出会いということになる。浄土真宗が多数派である馬山の日本人社会で、牧師の息子は学校でいじめに遭うような状態だったが、近藤は十人ほどの会衆の中で、美しい色彩の聖画のカードがもらえるのが嬉しくて、楽しみに通う。クリスマスのビスケットと若い将校夫人の歌う「アベ・マリア」が少年の思い出に残った。教会通いは、母の都会的で異国的な香気への関心と気まぐれな虚栄によると近藤は説明しているが、牧師夫人のオルガン伴奏で讃美歌を歌ったことは、のちに近藤のクラシック音楽愛好と西洋趣味、彼の相聞歌を支える西洋のリリシズムの獲得につながった。

教会を通じた西洋音楽の受容だけではなく、日本の支配階級の伝統音楽との接触もあった。近藤芳美は幼い頃から父が歌う謡曲は聞きなれており、咸興にいたとき、能の例会で父が「安宅」の義経を演じ、農園主の弁慶に打たれるのを悲しい思いで見たこともある（近藤 2000c：43）。朝鮮半島に渡って土地を買い占め、土地ころがしによって巨利を得、朝鮮人の安い労働力で生産した米などを日本に輸出して財を築いた日本人の農園主は銀行のお得意様であり、たとえ余興であっても銀行の重役が農園主を打ち据えることはできなかったのであろう。

伝統音楽との関係では、近藤芳美の母が習い事とした琵琶に触れないわけにはいかない。離れ座敷の開け放った縁から暗い海の潮の香りが立ち、飾られた琵琶のきらびやかさが、異郷における日本的なものとして目をひく（近藤 2000c：98-102）。母の演奏する曲は、屋島、小督などの平家物語や項羽などの歴史ものから、亡霊が現れる謡曲まで幅広く、一時期は毎晩その練習の演奏を聴くことになる。近藤芳美が琵琶の演奏を五感で感じ取っていたことがわかる。プロになる覚悟があるかと師匠に問われて、母は琵琶をやめたと近藤は語っているが、同時に、馬山を来訪した宗家の傲慢さと観客の野卑な野次へのひそかな嫌悪も描写しているため、母が琵琶をやめた本当の理由は明らかではない。

(3) 近藤芳美の文学、芸術との出会い

読書の喜びは、広島に預けられた3歳のときに年少の叔母から教わったとされる（近藤 2000c：17-18）。馬山の小学校で「綴り方」をほめられて、「お丸」のカードを一度に2枚ももらったことも密かな喜びとした（近藤 2000c：54）。

日本の伝統的定型詩との出会いは、馬山の小学校時代に、銀行の派出所主任の娘に誘われて、銀行の敷地にある社宅に行ったところ、徳富蘇峰の『近世日本国民史』などの蔵書とともに、河東碧梧桐の書を見せられたことにさかのぼることができる。のちに近藤は、この人物が碧梧桐門下の俳句作者であると知る（近藤 2000c：54-55）。この人物はまた、近藤が小学校の最終学年のとき父が羅南に左遷された際、「逝く雲と 止まる雲と——」という惜別の一句をはなむけにくれた（近藤 2000c：113）。また、すでに見たように、母の琵琶の語り物の曲には、「平家物語」があり、古典文芸の世界との最初の出会いを果たしている（近藤 2000c：56-57）。

童話作家で新童話運動の推進者の久留島武彦が小学校に来校し、自作の西洋風の童話を語って聞かせたこともあった。森、沼、古城という西洋的な舞台に、王子と王女、妖精が登場する童話である（近藤 2000c：78-79）。これは日本の近代化の典型的な一例と言える。アジアに植民地を広げていく近代日本は、西洋の植民地の住民のように「名誉白人」として、西洋の文化を優れたものとして積極的に吸収していったのである。日本的とされる風

景や気候から遠い植民地にあつては、目の前にある被征服民族の風景や文化よりも、見たこともない先進国である西洋の風景や文化を優れたものとして尊重し愛好することは、「本土」の日本人以上に難しいことではなかったであろう。

近藤少年は読書欲も旺盛である。日曜礼拝の後は、私設の児童図書館「金次郎文庫」に通つて、巖谷小波や久留島武彦、鈴木三重吉の童話や、グリムやアンデルセンのような海外の童話を読んで、童話を通して西洋への憧憬を育てていく。同時に科学への関心も高まり、天文の本などを読むようになる（近藤 2000c：88-90）。支店長社宅の応接間の父の蔵書には原書もあり、経済、金融や、オイケン、バルグソンの哲学書、高島素之訳の『資本論』、朝鮮の水田開拓の資料や写真集があつた。大町桂月訳注の頼山陽の『日本外史』を読みふけたことを、近藤はこれを最初の歴史への昂ぶりの経験か、あるいは、愛国の感情だったのかと振り返る（近藤 2000c：92-93）。東京から取り寄せた一揃いの科学大系の口絵に魅惑され、科学の神秘の世界に引き込まれ、胎児の図解におののいたこともあつた（近藤 2000c：93）。

孤独癖は続き、夕方になると一人で家の裏の、麦畑の傾斜の中の古墳の塚に行き、湾と暮れていく背後の岩尾根と一番星を見て、詩のようなものを作つた。また、学校の綴り方の時間に、東京の児童文学の運動の余波として、小学生の自由詩を作らされた（近藤 2000c：93-94）。

雑誌『子供の科学』（1924年創刊の子供向け科学雑誌）の人形劇の作り方についての記事に触発されて、カーテンも照明もある小さな人形劇場を作つたこともあつた。それは、新童話で覚えた、西洋の森と城、王子と王女、馬に乗つた騎士から成る劇場であつた。これは、のちの建築の仕事につながる立体空間の感覚を養つたエピソードとしてではなく、空想の物語に淫した思い出として記されている（近藤 2000c：103-4）が、西洋趣味の涵養がここにも見られる。

クレヨンで写生画を描き、馬山湾の沖の猪島の断崖の色や、町の背後の舞鶴山の岩肌の色を出そうと苦心して、油絵のように塗つたあとをナイフで削り落とすこともして、展覧会に出品される。これは胸の奥に灯された、自分にできること、芸術への衝動として記録されている（近藤 2000c：72-74）。

（4）尹伊桑の教育、音楽との出会い

尹伊桑は、日本人による近代化に反対する父の方針で、五歳から八歳まで辮髪を結つて書堂で中国古典（「論語」や「荘子」）を学び、書道を習い、漢詩も作つた（尹・リンザー 1981：31）。八歳で洗兵館の中にあつた小学校に入学し、初めてオルガンに触る（尹・リンザー 1981：32）。西洋音楽との出会いはもっと早く、近所のプロテスタントの教会から

聞こえてくる朝鮮語の歌を覚えたという。小学校では師範学校を出た先生から西洋音楽を習って、楽譜を初見で歌って才能を認められ、学芸会では独唱する（尹・リンザー 1981：33-34）。

十三歳のとき、東京で勉強した人にバイオリンを習い、別の人のところでギターも習って、西洋の流行歌を演奏した。同じ頃、作曲を始めたが、あるとき、町の映画館の幕間で西洋音楽とともに自分の曲も演奏されて驚く。バイオリンの教師が彼の書いた楽譜を楽師たちに渡したのだった（尹・リンザー 1981：34-35）。内気だったので自分の曲だと誰にも言わず、反対されることがわかっていたので両親にも伝えなかった。父は音楽を趣味ではなく職業とすることに反対し、バイオリンのうまい人の前で演奏させて才能のないことを息子に思い知らせるという厳しい態度を取った（尹・リンザー 1981：36）。それ以後、尹伊桑はバイオリンは弾かず、レコードを聞いて勉強し、作曲を続ける。声楽とチェロに興味を持つが、音楽理論はまだ知らないままだった（尹・リンザー 1981：36）。

(5) 尹伊桑の歴史教育と、近藤芳美の理念を持つ教師との出会い

日本人の圧倒的な経済支配の下、尹伊桑の父は仕事の上でも日本人と関係を持つまいとしたため、一家は経済的苦境に陥った。三・一独立運動の民衆蜂起と大量射殺、武闘から文化的抵抗に変わる時代の中で、尹伊桑は子どもとして無自覚に独立運動と関わる。父から中国と朝鮮の歴史を教わって、自由の英雄としての李舜臣提督の物語など、日本統治下では禁書とされる書物を書庫から運ぶことを手伝うなどして、民族の誇りと独立への希求を強めていく（尹・リンザー 1981：37-39）。

近藤芳美は少年時代に受けた歴史教育について特に語ってはいないが、14歳のときの教科書が「近藤芳美寄贈図書」の中にある。1927年（昭和二年）修正再版（初版は大正十五年）の、三省堂編輯所発行の『日本歴史地図』である。これは中等諸学校（師範学校・中学校・高等女学校・各種中等実業学校）の教科書である。第二図「日韓関係要地図」のページの「任那及三国時代の朝鮮半島（紀元1000年頃）」の「任那」のところに鉛筆で線を引いて「大伽羅」と書き込みがあるが、いつ書き込んだものかは不明である。1998年の韓国再訪である「近藤芳美先生と行く韓国古代史の旅」ツアーのときかもしれないが、古代史の一般書は「近藤芳美寄贈図書」には多く存在し、朝鮮半島と中国大陸への興味は生涯継続したことがわかるので、書き込みの時期は特定できない。

教科書の内容を見ると、外交にも触れられているが、戦乱・戦役関係の地図が多いことが目立つ。「日清戦役関係要地図」や「日露戦役関係要地図」は各地の様子がかなり詳しくわかるようになっている。たとえば、「日清戦役関係要地図」は、台湾、旅順、黄海、平壤、江華湾、威海衛などの詳しい地図が掲載されている。この教科書のページには「日本

文学年表」（上古・中古・近古）が挟まっており、「著名作者の在世年間」が横線で示されているが、これは目次にないので、別の教科書か別の書物のものと思われる。

尹伊桑が書堂や父から受けた儒教的な教育に匹敵するものは、近藤芳美の場合、小学校の最終学年を過ごした広島私立済美小学校で、校長が受け持った修身の授業である（近藤 2000c：112）。坊主頭の禅僧のような校長は、文部省の国定教科書などを使わず、自分で大きな和紙一枚に刷った孝経の全文（白文）を配布し、毎時間音読させる授業を行い、生徒たちは意味もわからない漢文を知らぬ間に暗記してしまったという。「孝経」について、『世界大百科事典』の説明を引用する。

孔子の弟子の曾子の作といい伝えられる儒家の古典のひとつ。《論語》とならんで五経につぐ地位があたえられた。孔子と曾子の対話の形式にかりて、天子から庶人にいたるまでの各階層それぞれの〈孝〉のありかたが説かれ、また〈孝〉の徳が〈天の経、地の義、民の行〉と天地人の三才をつらぬく原理として形而上化されている。〈孝〉は儒教倫理の中心であり、かつ《孝経》は短編でしかも《詩経》の引用を多くふくんでいて暗誦にたやすかったから、知識人家庭では《論語》とともに《孝経》を幼童の教育に用いた。歴代の王朝も《孝経》を重視した。（加藤ほか 2014）

親孝行をすすめる単なる道徳の書ではなく、世界観と人間観を表す書なのである。近藤芳美は、この教師について、「古い、精神主義者ではあったかもしれないが、一種の、理念を持つ一人の教師との出逢いであったとはるかに思い返さないではない。」（近藤 2000c：112）と述懐している。これは、修身の教科書の中で矮小化、単純化され、時局に都合のよい人材の育成に用いられた古典の断片ではなく、古典そのものとその背後にある巨大な思想に初めて対峙させられたことの意味を言おうとしているのだろう。

6. 結 論

以上のように、尹伊桑と近藤芳美の幼少年期の比較をすることによって、日本の近代化政策の下で西洋近代と東アジアの伝統がせめぎ合う朝鮮半島と日本における、二人の芸術家の幼少年期の自己形成の軌跡をたどることができた。尹伊桑は東アジア共通の中国古典に親しみながら郷土愛を育み、伝統音楽に親しみ、両班である父の生き方から学んで、自己の世界観と芸術観を養い、近代西洋音楽との出会いも果たした。一方、近藤芳美は、生まれ育った朝鮮の風景に深い愛着を感じながら、日本人と朝鮮人を分断する社会の中で、西洋近代をモデルとする日本の近代教育を受けて身近な朝鮮文化よりも西洋文化への憧れ

を強めたが、同時に『孝経』の素読や謡曲や琵琶の曲を通して東アジアの伝統的な教養も身につけた。そして当時の男らしさとは異なる感性の持ち主であるゆえに、孤独な読書と思考癖から自らや家族や日本人を客観的に見る視点も身につけて、エリート教育の中に内包されている同じ東アジアの伝統を共有する異民族への蔑視に対する独自の批判的視点も持つことができたのである。

この後、1945年の敗戦までに、尹伊桑は父の意向による商業大学進学の後、父の意に反してソウルに上京し、日本留学、統営での教師生活、抵抗運動への参加という青春時代を送る。一方、近藤芳美は広島で中学で短歌と出会い、高校で短歌結社「アララギ」に加入、東京工業大学で学んだのち、清水建設に就職し、結婚後まもなく応召するが、負傷と疾病によって除隊されるという青春時代を送ることになる。二人の青春時代のさらなる自己形成と時代との関係については、別稿に譲ることとする。

付記

本論文は、2017年度中央大学特定課題研究費の成果の一部である。

「近藤芳美寄贈図書」の調査をさせていただいた岩手県北上市の日本現代詩歌文学館に感謝申し上げます。

注

- 1) 『傷ついた龍』では建物の名称は明確ではないが、日本統治下の統営で取り壊されなかった大きな建物は洗兵館のみである。
- 2) 『アジアで生きる、アジアと生きる 中央大学文学部プロジェクト科目の記録』に収録された講義において、近藤芳美の三・一独立運動に対する反応について、「日本人から搾取されたり、暴力をふるわれたりする朝鮮人に対して、深いシンパシーを感じた少年だったようです。」と発言した(大田 2018: 94)。しかし、本論で論じたように、近藤は少年期に朝鮮人とそこまで深いかわりを持つことはなく、彼の反応は「恐怖」であったので、この発言をここで修正しておきたい。
- 3) 森崎和江の戦後初めての訪韓は1968年である。森崎和江は「わたしたちの生活がそのまま侵略なのであった」という自覚を持ち、「敗戦以来ずっと、いつの日かは訪問するにふさわしい日本人になりたいと、そのことのために生きた」(森崎 1991: 45, 203)という認識に立って、朝鮮との出会い直しをしようと努力した。
- 4) 2016年9月3日仁川ディアスポラ映画祭のときの筆者との談話に基づく。
- 5) 清和女塾は、1933年に「朝鮮に育つ内地人の娘達に、朝鮮に生きる態度を教えなくてはならない」ということで設立された学校で、設立者の津田栄の母が塾長としてお茶を教え、妻が塾監として直接の指導にあたり、弟が社会問題を教え、森田芳夫が朝鮮問題を教えた。津田夫妻の開明性を森田は評価しているが、高崎宗次は改良された朝鮮服を着て朝鮮人の教育者や文化人とも交流した津田夫妻の日本人としての限界を指摘している(高崎 2002: 168-9)。
- 6) これが統営の弥勒山の龍華寺か弥来寺か不明。

参考文献

- Britannica Academic*, Encyclopædia Britannica, 25 Nov. 2009, “Tongyong” <https://academic.eb.com/levels/collegiate/article/Tongy%C5%8Fng/82549> 2020年2月20日アクセス
- 『ブリタニカ国際大百科事典・小項目事典』「馬山」<http://japan.eb.com/rg/article-11336200>, 「馬山浦事件」<http://japan.eb.com/rg/article-11336400> 2020年2月20日アクセス
- 朝鮮写真絵はがきデータベース kutsukake.nichibun.ac.jp 2020年2月20日アクセス
- 太宰瑠維 (2000) 「解説」, 『近藤芳美集』第8巻, 岩波書店.
- 袁珂 (1999) 『中国神話・伝説大事典』鈴木博訳, 大修館書店.
- 鎌田正, 米山寅太郎 (1992) 『大漢語林』大修館書店.
- 神奈川大学 非文字資料研究センター「海外神社(跡地)に関するデータベース」<http://www.himoji.jp/database/db04/permalink.php?id=597> 2020年2月20日アクセス
- 加藤周一ほか編 (2014) 『改訂新版世界大百科事典』平凡社.
- 川口美根子 (2000) 「勁い思想に秘める傷痕の碑」, 『近藤芳美集』第8巻「青春の碑」, 月報6, 岩波書店.
- 『京城日報』1928年10月25日付. http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/ContentViewServlet?METAID=00474305&TYPE=HTML_FILE&POS=1&LANG=JA
- 近藤芳美 (2001a) 歌集『希求』, 『近藤芳美集』第5巻「歌集5」, 岩波書店.
- 近藤芳美 (2001b) 歌集『命運』, 『近藤芳美集』第5巻「歌集5」, 岩波書店.
- 近藤芳美 (2000a) 歌集『早春歌』, 『近藤芳美集』第1巻「歌集1」, 岩波書店.
- 近藤芳美 (2000b) 『青春の碑』, 『近藤芳美集』第8巻「青春の碑」, 岩波書店.
- 近藤芳美 (2000c) 『少年の詩—青春の碑序篇』, 『近藤芳美集』第9巻「歌い来しかた」, 岩波書店.
- 近藤芳美 (2000d) 『歌い来しかた』, 『近藤芳美集』第9巻「歌い来しかた」, 岩波書店.
- 孔子, 孟子 (1972) 『論語, 孟子, 大学, 中庸』倉石武四郎ほか訳, 筑摩書房.
- 李仲燮 (2016) 『이중섭, 백년의 신화』韓国国立現代美術館・徳寿宮館「李仲燮 百年の神話」展 展覧会図録.
- 水野直樹ほか編著 (2012) 『図録植民地朝鮮に生きる 韓国・民族問題研究所蔵資料から』岩波書店.
- 森崎和江 (2007) 『草の上の舞踏—日本と朝鮮半島の間生きて』藤原書店.
- 森崎和江 (1991) 『慶州は母の呼び声』ちくま文庫 (『慶州は母の呼び声』新潮社 1984年と『こだまひびく山河の中へ』朝日新聞社 1986年の合本).
- 『日本歴史地圖集』(1927)三省堂編輯所発行. 修正再版. 初版は1926年.
- 大田美和 (2018) 「詩から見るアジア共同体—夢や希望を実現可能なヴィジョンにする」, 榎本泰子編『アジアと生きる, アジアで生きる 中央大学文学部プロジェクト科目の記録』樹花舎, 89-104.
- さいとうなおこ (2006) 「II. 戦時下の青春 1937-45」, 日本現代詩歌文学館編『特別企画展「近藤芳美—戦後短歌の牽引者」展覧会図録』32.
- 司馬遷 (1971) 『史記』小竹文夫, 小竹武夫訳, 筑摩世界文学大系6, 筑摩書房.
- 徐京植 (2012) 『私の西洋音楽巡礼』みすず書房.
- 『清和』19号 (1971), 20号 (1975), 21号 (1977) 清和女塾同窓会.
- 田井安曇 (2006) 「大きく重いということ—近藤芳美展のために」, 日本現代詩歌文学館編『特別企画展「近藤芳美—戦後短歌の牽引者」展覧会図録』14-15.
- 高橋伴明監督 (2012) 『道 白磁の人』江宮隆之原作, 林民夫脚本, 小説「白磁の人」映画製作委員会 / 「道～白磁の人～」フィルムパートナーズ.
- 高崎宗次 (2002) 『植民地朝鮮の日本人』岩波新書.

- 鶴見俊輔（1972）「近藤芳美論 集団の熱狂から自由な眼をもつ歌人」, 現代短歌大系 6『佐藤佐太郎・宮柊二・近藤芳美』三一書房.
- 鶴見俊輔（2000）「作歌と選歌」, 『近藤芳美集』第 1 卷月報, 岩波書店.
- 吉田敦彦, 松村一男編著（2011）『アジア女神大全』青土社.
- 尹伊桑, ルイーゼ・リンザー（1981）『傷ついた龍』伊藤成彦訳, 未来社.